農業自得

下冊

特1
271

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271

ガラス使用

特1
271

農業自得巻下

下野國河内郡蒲生村
田村佐兵衛門吉茂著

大麦

麦は米に続きて農家の一大穀物也。依て作術行届たるべし。凡秋の中頃よりしてより冬に至るの間、雨ふらざれば土くれ砕けず。又春先の寒き内、霜ふらざれば実入あしく秋ふかくして実らざれば

文久二年
戌九月右ハ

まぬかるれども培厚ければ培厚きを喜ぶ。培厚ければ培厚きを喜ぶ。

かるさ。千粒のより粒よく解ひ重べて。又収納
小屋もよりよきを〳〵作りておくもの。
図細よりその一穂の方を。よりて一束ひ。
立をけいの粒をかるさのごとく。
おこさ所から打るらして。所時の日久けを見合を
かーる千歳。其八大麦小麦とも皆一束ひ
おこさ置より。横ふ積てハ束ねる積べし
○麦ハ田畑ともふ古地こさを重む作り。

幼る深く耕ひをよくす。
落よる。十日余も前く耕つ
牛馬をのく数頭んかさて。
かさを踏〳〵。苗その後も解く踏べ〳〵かさきり
ものい深く出穂す待て教へんを踏〳〵。重く
の荷そばより。又七日もよく前仕方左之記す

大麦種子割合

○大麦壱斗の粒数四万の粒数あり。
壱畝歩ふ横三尺長三尺の割り。

此苅数二十二本の穂より
壱合壱把一束ふ。
壱把一束ふ。
壱把ひとかぶ。
壱把ニて麦粒と稈とのふ。
壱反歩ニ
麦弐斗四合七夕余ふ。
但一かぶ稈ふ稈共を減じ屑ら

右稈ふ一束ふ。一把ひとかぶ。稈共を差引
ふ。十本稈共を差引ふ。
壱把ニて麦粒と稈とのふ。
壱反歩ニ
麦弐斗四合七夕余ふ。
但一かぶ稈ふ稈共を減じ屑ら
ニ而ハおゐしい稈ふをまもよ
地そをものふれ六下ふ。
稈十本余ふ。
壱把のふ。
壱反のふ。
ここさ多く苅りて壱束ふ。
まもて稈もそろて実入ふ。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

なすあて。多く実り。豌豆も多く大麦も有て。
蕎麦一斗にて七斗位あるものなり。荒地を墾るより。
掏減りなき麦あり。是を能く考へ仕るべし。
○肥培の物を翻油粕糠へ交ぜ。
て元肥おゐ一二三味合せて土地へお廻しおくべし。
をよく混ぜ用ゐるべし。よく腐れの揃ひ
ても。よこいを用ひざるべからず。
れば悪く実りよし。よく腐ることこれ
ハ実りなし。豌豆もれば実有るべし。

のるふ是あるを称ふ。か減分一ちり。下の土地そも
ふれ有べし。ことを用ひて作るべし。掏麦も合ても種
掏麦又合あるも。あそを用ひて種べし。名
らく方と収納方ある者也。優ち地のよがよ
らべし。よくこの土地を味ひよく実る等一覧
くも地の能ちり又よくちふまそる。
地あて実りる穀物の味ひおるものなり。能く
考へ。
○大麦小麦一度あそべんを〔ひく〕ふ宮寺限りと。

よく人のまでゐ。二月しがんやたねおろしてそのあとを開墾して麦の苗を植ゑ付ける。植ゑ付けるにも掘り穴を掘りて植ゑ付けるあとへ灰を入れ置き。四五日もたちてから苗を植ゑ付けるがよし。灰を入れずに植ゑ付けるとあとの肥料が悪くなる。灰を入れて植ゑ付けるとあとの肥料がよくなる。灰の入れやうは穴の底へ入れるなり。灰を入れて苗を植ゑ付けるとあとの肥料がよくなるのはこれの理を考へて。こゝをのがさずに植ゑ付けるのがこゝの修行なり。能く通りんを遂げて肥料を施すべし。

○むけやと言ふは。麦也。苗方小麦ふかうゑ付けるなり。植ゑ付けるには。大麦小麦ともに苗方ふかく植ゑ付けるなり。

くゑ付けられてゐる苗床の実のおもり。苗床一畝に付て九合あり。麸ようには。麦もぐさ。麦ぬかなり。麸ようには。皮麦もぐさ。麦ぬかなり。皮麦もぐさ。麦ぬかよりは。麸ようがよろしうござる。麸ようは。

麦種撰方

○麦穂撰くして。粒数多く粒の充ち。形色白く艶有て中熟かつ重きものを取。粒ぞろひを一種ずつ。えらみ分を二合ずつ又は多く撰人れたる合みて。芽ぶけ試験よくの種よりの実り多く。又早熟にて。麦の実り穂細く長く粒も細長く

充粒ぞろひ。芽ぶき揃ひ。発芽一斉揃て。平年より多く合信あり。又麦作年ふりて。らくてそだちのよき。

○関東宮崎のあかの記

人ぶりて。丈長く。穂大麦多く。ひらり。ひとの作人も同知あり。七八年作ふりの撰ふる事を要要とも。粒ぞろひ。芽ぶき揃ひ。よくそだつ方を。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』　請求記号 特1-271

ガラス使用

一種ノ苗。於ル移植ノ後ノ手入。
草取ノ事。只多ク取ルヲ以テ勝レリトス。
草取ハ。水干ノ節ヲ以テ。
苗ノ間。草合ハ夕ノ内ニ。
草取ノ事

草取ノ事。
草ハ。八合九分ノ割ニ。
○種子ノ撰方ハ。種籾ヲ能ク撰ミ。数ヲ多ク。
ひねつ。ヲリヲリ。種数ヲ。
なる丈ケ。重ク種ヲ。

溫飩餅ごしに製するおーひる毒消しー溫飩うどんを食べ勇氣を出すなり。不毒の食物をえらんで食べ

種子貯方

○大麥小麥ともによく乾かしおーの種子を紙の袋に入れ。種子後のまの中へおくなり。初陽ふ收納して大陽の内に於て充分乾かし其口を堅く封じ置くなり。此時陰晴和合をさだめ置くなり。後の年へおくの風にさらさざるやうにするなり。

陰陽和合をさだめ置くなり。此工夫一也。依て古用手をそなへ。落ちを便り種子夫食穀る時天の和を約べし。又古用とて棄るべからず。又平て貯ておの千方收納時と古用中。古用とこ二年共大麥の上を干ハ歯ぬて破れ蟲の侵をさまそうに粉まるをよく干とて又長く貯ふ年を古用年をして貯ふ揚ひこ出せず。

大小豆

日寸法藏

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271

ガラス使用

○大豆ハ土地こゑたる所を好むものゆゑ秋それをきろう。
莖葉をてゐ土ゑ切ころばかしてをくのいろ〳〵ありて春より蔓のち甫三四寸日前を苅て實ハ俵ゐ納り易き仕方ゆゑ委敷ハ記さず。
苅たる跡ハ大麦をそこゑ一生苅ハ大麦をそこゑ
ある。又實り悪き場ハ干鰯粉ぬか抔を用ゐ實ハ實のりよう。但ハ秋の雨こゑ莖ハ腐りて實の入悪敷ゐ成ものゆゑ成丈ケ早く苅取のこゑ肝要ゑ候

粟

○粟ハ春ハ一所ゑ苅ハ地ゆるくもよろしき。ものゆゑ肥ハ多く用ゐる事ハ一粟ハ洗ひ稗ハ不用ゐ
土地よろしひ所ゑ種を仕るべし。
て多く苅さゑゑ穀ハ多ゐ。
一四地カユニヤキ
一四地ゑ三年忌禅すべし。在来ハ共ゐ
ゐゑ二四年も忌苅ゑ。
て苅をよろしと云ゑ。
收粟ハ重ゑ候の故年も多ゐ
苅てもよし。但一坪ゑ

遅く苅べし。早く苅べし。方ハ苅のよろしき
より。二十日位ゝ早く苅べし。収納を能く熟
を而納もべし。

稗

○稗ハ其年一能く類を易ゝて。其年
作べし。是稗ハ八十八夜前後に苗代を
苗成長して種るをよろし。大麦の熟するを前
ハ苗代を種れハ実のりもよろし。大
麦あり苗の長ハ方ハ苗を取植る。

種る。四方四又四方ゞ。深さ
指ほどの白き粒を入ゝ年あり。
四時ゝ苗七八寸ゝ生ゝ
一ゝ一ゝ二ゝ苗を植ゝ。
麦を苅ゝ取ゝ植ひ。
植仰一ゝ植ゝ。
方にゝ一ゝ植ゝ。
多く能く苅ゝ一里塚ゝ。
ら。ゝ地をゝ年。

田地荒蕪を破くるこそ。（カエシマギ・アトキライ）
えて男ひびきて。実ばり
勧め方も雑こそを開くべく
みそれ。あり意所
原を転ぐ作もご。一反
位と。実所有て。意多く
作り人も悪。お私へ実
一地よ相意の理を考へ作るべく。
業稗れよく平て病意べ数千年おそせかそら

ば。飢饉又色々の。詩のそるべ不字上の忌

荘

○荘上加そる荷物も。他の地荒
多里をよろこえ意作るべ（田地荒カエシマギ）
ま。あ称論をつもまり。
まバ。渡手一円意を。
前の仕方れ大和種の作。ち人堺一坪
代を植ひ荘の見方を下。
當年西下一種る去。一株二本つまりて株

楮の苗を一尺七八寸位に切り、一本を植ること一畝に付て三百本宛植るを一畝の種とす。苅肥の仕方は前に述べたる方を用ゐべし。

胡麻

○おそき苅肥にて、六月跡を入て苗初めてんげもよし。四五寸位の時、一畝に付て三升も蒔くべし。四五寸位の時、こえ（干鰯）の醤油粕を用ひてよし。くさみ（雑草）の時分のことを用ひて。

苅るより仕舞迄胡麻をも。さこえを多く用ゐべからず。

里芋

○芋を食の助とする為多く。あれば雑煮をも。

多くこえ（肥）。

なくても。栗芋は種芋を植ること。

ある。又売の為人参も有べし。

植る種芋の際方、先芋売の為に切りて。切る時は芽の多なる芋ならば色かりに又芽の多なる芋ならば色かりに。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271　　ガラス使用

是ありて。売ふ見ゑをもとめ。
ふ孫にうるよき地を。移すをこのむ。
ゆゑに。ふ川有用の水をあつめ。
あそこ米馬の糞をつもり。
冬の間に。四五さのこえを用ゐ。
年もいもと稗蕎麦を植。
移すふ。紀年もよし。

○八十八夜後とより。大豆
蒔培を用ひそよし。
○生えての後。
植うるは二月中
より。四月さのこえを施すべし。
○なす種蒔ふ。七

けて植ゑ。其後より倣てこ
寄よりをよく見て。
から年みて。子をとりて
あらば深く耕し。又大麦の中
より。ふ掛豆二条植て。一条
蒔とき。其大なるを。
つくり。続く所ふ。
其朋うタ方水多く浸ぐ。
ふ苗売をふ川ぞ。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271

ガラス使用

収納の時に米売米さうる時ハ。
俵網めを附ける。米を売ハ
つゞら。俵一の為ハ。七多く有てよき
ハ米ぜ。一通りあつて厚重ち
がくのハく米をもて能く合せ無。
もよ宜事ハいてます。米ハ徳分多ハ
喜べ念ころハ入てゞ俵ハ
製ねもハ俵ける。能く表
・甘薯

○さつまいも徳分多く作
なる事。毎年日本一の穫ハ
く多く。野外ハ沙地ハ
俵ものり近頃ハ漸く俵
なりまいの仕方貯方の大略を記す
○苗ハ仕方ハ寒ふりて
苗床をこしらへ苗代の拵方ハ日向ハ深
さ七八寸ハ尺巾ハ好ニ切
半間の長ハ又ハ庵の長

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

かり干魚たるもの。二人ふすま
もつれもまた不出来あるをかゝぜて
又刻なるべし。いも
○一反余ありて。松もその
葉ふるゝ。一日ふこと。
なるを。水の有余ありて
を。双方より押分ること。
古代の中種にうるくかも
もを。水の
ふすまを減むること
○秋。羊擔一次
を種として。百姓

すの時上の如くを。
くて。始終晴うする様ふ。
を時こぎ。こゝふいも
う。せんじ汁を薬よりかけて。水
糞ともに同様。第一肥
くこぎ。雨降ふかもそもよう生
ても。代えて。刻り薯時いものくふ濃糞
を汲ふ代あるまりて。
の枝葉ふ代へ種ふを植

で。水戸月末ふ植れバ。たゞ
ちよく。実へ。もより。まよ下ゟ。種ふ。出ル。
メ月。もんげ種ニ三年目位の秩り。
大ふ多ふあり。植ル十日も。ゟ。
つるつるつたる。ゟ。ニ。
もさゝの。芽。近ゟ。ゟ。
切ル。ふ。芽多く。つくる。つ。
して。植ル植べし。ゟ。
深ふ二寸ふ及ぶ。植ル。

ゟ。附ケべし。早。
ちよ。知ル。地ゟ。
実。地ゟ。芽長く。節の。
つま。又。翌ゟ。ふて。
実ゟ。種ル。ふて。植べし。
味ゟ。考へ。二。
生ル。ふ。実ゟ。
で。中ゟ。実ゟ。
仕ル。ゟ。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

もの故水少き方八秋の末冬の初め一番
雲降雪ふりて能実入ると時多くあり。
其日一日不天晴ふり雪深さ五六尺
の穴を堀り籾を入れ置く。又多く貯ふ穴の中へそ
ち籾一俵に依て其の穴の大小ありても保
ちやう。穴の中へそのまゝ籾を入れ置くと
きは長持をせず。俗に籾ぬらすと称ふ
なり。穴のそこへ籾ぬらすを防ぐ為藁を敷
或は俵を用ひ籾を入れ置くなり。

のさまゝぬ様ふ。一通りあつ
たらば又ぬるを入れもを
ふべし。俗に是を通り置と称ふ。
此籾ぬらすを防ぐ為藁を敷
ぬるとを防ぐ為藁を敷
ふ。俗に俵方あり。俵
穴の底の籾をぬるゝを防ぐ為
生ずる。故に雪高く積れば其
も損じたる時俵を高く
なり籾ぬるゝ。俗に更ゆ

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

ゆえんぺ。六七月までに終つ
もの〳〵。苗を植ゆるを植うる
と通り。晩するを植うる
及びぺ。大川ぞいの古地の
代籠まで。そろ〳〵生ぶ
代を大きく植ひ。代の中程
より方
おゝ〳〵。まん中を仕立
一尺ばかりのそこ。平面
極寒圃も重宝で。代を
まんぺ。俗に、いのち
の生地ぶて。生立へ。

田村氏義

苗代の寒暖を考へ。甚四里ぐれ定法を定めた
ものぞり。○植ぐるのくを
よく揃さ。苗を太ぶり所をぬの
みぐこう。植おいて植ゑ直すをうるぞを
流ぐ。又苗を入ぬ事ぐ。
ぜ。ぶ数へんさらぜぶ。
さ処ぶりする。もて庭ぐ
ぺ。天道の寒ぶ不ぐる事ぜ卿る
や

岡穂

○おかぶれ水溜ある物あり種子を水に漬け苗の丈ぶ一尺ばかりに成ば苗を畑へ植ますれば水をかけるた稼ぐ事ハ入ずして能く成る工夫して作るべし

木綿

○綿ハ土地ふとりて能ところに作るべし古地あれバ新地を開くべし古地ハ苗小さく新地ハ苗大きく成る

實を取るを専ら実綿を売て代を買ふ関東筋ハ八十八夜前後に種を蒔く事なり。

とゝ実綿筋ハ八十八夜前後の方ハ土地あり代方ハ土地ありくの人ゐ向ふべし。綿作ハ中一人ハ土実ハ土ありて作ても実綿の方ハ甲列より多く取るの綿実ハ三月まで俵ら

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

あるら大略の名ハ皆中おなじ事ながら
おのゝ物ずきよう〳〵外の雑こと多く
有なんげよふ〳〵。古言とハ
いへ。なぐもよう〳〵初ものゝ
大きふ言あそ。かきりハせ。それまでお
ちで。依るまゝ茎ともに冷水を
おふ紙ニ通り冷食ハ並
あるものおゝ〳〵。ぞんまゝ
あり。依る給菜ある所ハ
なふ名産也。旦那年の定
ハ大方豊なるべ

大根

○大根ハ秋の事。秋大根を宝とて。里く
おゝくて。三月大根。夏大根。秋
大根ハ夏の。六月中より苅初あり。又ハ冬
夏て苅あれど。ハ宝の
をよりとて。ハ冬ハ大根ハ
なく。行てくるりおゝ。お大根ハ細く。お苅

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

いそしむ。其こと天皇家のおほんために
も。深く願ひ奉る。尾こそ牛の尾こそ等
より。但水清き所をすべし。若し濁水
を飲ませば。必ず病来ること陽気
の動より。陰気の静へ入るが如し。陰和合
して。乳を生ずる理なり。右朔日のあらざるうちを
浸けば。其ものくもよし。
○かぶら菜。乾も蔵年みな作りて穀物の

かてともなる。其ものさまおほかる
能書を見よみて。作るべし。大根
根より十月まで。前ごろ。大根
もおほくうゑよ。春夫根もおそ
さゝ葉より。生立ち。葉を食ふ時
いかく虫を生ずるゆゑ。古葉の朽
を取てよく集めおくべし。
くれ葉ぶりをぬり
もとより。又もとを

田村氏藏

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271

ガラス使用

するで

苧蓄子

○あさねは地を選ばず。あらき地を深く耕し。畝を高くして。苗を植ます。畝と畝との間は。秋土用前に。上より下へ。鍬にて。耕ごし。移すには。雨天を。見合て。移すべし。苗の仕立は。前に。知らせ。置たる。如く。大麻よかるべし。苗植移すも。前に。知らせ。置たる。如く。苗の仕立は。

植ふまでを。前に。写し。置たる。如く。植長は。一尺。

麻

○麻の善き地は。山畑の。地こやし。厚く。入たる。地を。撰ぶ。依て。秋刈。豆。粟。稗。麻地を。耕す。春地を。耕すは。遅く。なるを。嫌ふ。

○麻種を。蒔ます。大晦日を。撰ぶ。種長は。一寸。

二月半のころまで。蒔ぬ。
春になりての種まき。四月会後前ぐ。こえハ
油粕をよく風て上。引方ハ。
苗のそだつ。ころ。引方ハ。
まのやうにふて。一二ハ
きものやうにふて。一二ハ
きをふただね。是を釜の中ふいれ
そとより櫛をかけ。むしてほをとる
〳〵。又長きまゝふくろを釜の
中へ入。ふたより上の方を
みの釜の中ふたて。釜を廻るの
ようにさゞ湯まのなかへ
なく。たきて湯ま。さ
るべし

○このたねのこと。
ま二番そとるべし。
より。苗地を能耕
べし。春四月一日
ハ。苗代一坪へ。
ハ。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

蒔ごと。苗こえ。農業を汚ぶ極苦そ。
苗まきそろ。ぴそり。ぴそ。
夜ごとをて表外納めハ。
○
一。元のそゆり時。まきまそ。
こそ。五千ごと。二毛も。古田ぶそり。
あごと。のの。
別のののまぬみたそ。
なるや清汁ごと。
こそ。差かそ。作そ。
紀ず。作。和そ。
○
名菜
○
名ぶ。介ますけべ。
毒の未。
二代をこと。秋の
みよりて七月。
ぶり合ぶ。霜よ
りて極れ。
一。元のうち汚ぶ。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

多く周ゆるく及び枝てのぼる去のかさゝめ
やうふ。せんそくみをゑ。ゑ。仰お前
れ花てゑゝ咲て。ゑ。何
〳〵
苗子
○なすび稙ゑ。はんぢ紺〳〵たるをとりこゝろ
包み漬のことし。うり三日を三日の也
川。まく時ふうり出〳〵。洗ひめ〳〵かゝか
〳〵て商ひ〳〵。付ハ日向〳〵。牛ゑのゝさ紀
を。一夫ゝ五すゑ。ゑ。仰お前

お。古さ〳〵さこゝろをお。おまたし〳〵て。二三すゑ
て。漬こゝろをうけ。二三日平て又ゝ。ゝさゝ
きこゝろと古と原をゝ。それ紙ふり。合て一す
もをゝ。馬ふんうゑゝ。ゑ。ゑ。ゑ

もみくろ紙るで。すき
油をふるのようにふりかけて
らいふをとり。俗ぶるねばい
至手せいたちまちもまこと
ぶんまるで。ぶくぶくいふすの
おもりで。生まちとり。種子まで能むん。
洗濯をほぐぐで。又九条二枚ひでおる
時いろのメ和せんけをそそぐで。
まさいうをさ。糞をよく

こゝを。多く用ふべし。かくせハ多多り。
あるなり

種蒔

○たゞこれ我里いまゝでこれ。かゝるたぐひ
一四年の際。古地あらバ。麻の不熟を
うり。原ふ合せて。用ふべし。古地よ
一これ胎の。あるゆゑなり。古地
ゐんせう。いわゆる。高き里にて。よく熟した
ゞこれ。なり。笹の葉けゆゑふなり

なるたゞこれ用だゝを。
年。高くあるそのべし。
ある事。きめうなり

蕎麦

○荒地ふうく。又山根あるいハ。焼畑まく
こゝあり。その和ふ。多く作る。
旦雪の。垂迹ふりて。苅せうを。定め。近
辺ハ。の。云用迄て十月。
水を。ふ。胎のかゝるゝ時苅

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

べく。稗をこしらへ。こゝろ
ざす。招(まね)きあるものより
事(こと)あり。たゞ二合更(それ)より
もみうるべし。人合(にんかう)十日のうち
皆田(みなた)あるもの。これを
知(しる)合(あひ)て。用(もち)ひ
引(ひき)あふべし。又両
より。七八月(しちはちがつ)までの冥加(みやうが)あるべし。九月
より十二月(じふにがつ)まで。冥加(みやうが)あるべし。

日本巨利

あり。皆(みな)信(しん)ずるに足(た)らず。
一。冥加(みやうが)ある家(いへ)は。
畢稲吹稲の伝

○畢稲(ひつとう)吹稲(ふきいね)は。一里(いちり)より多(おほ)く郷(ごう)
ゝゝあり。又時(とき)の
俗(ぞく)あり。おくれを
おくれの用(もち)ひざる
ふ。冥加(みやうが)大(おほ)ひふを加(くは)へ。中
稲(ちう)なり。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

ふ熟せだ。おくて。もみ。
だ。おるたけだんぜ。
あるものいお麦稗未納
ものの。ためふ作り実ぞ
江作ふがいあり。そこ土
思ふそんな百ふふうの
ものたねこおるあり元来
より。あ。一分上のようこ
さうあた当色だん。
ふ熟せだ。もみつる貧く作ふうのふあら
ず。ふ熟せだ。おくて。もみ。
だ。おるたけだんぜ。
あるものいお麦稗未納
ものの。ためふ作り実ぞ
江作ふがいあり。そこ土
思ふそんな百ふふうの
ものたねこおるあり元来
より。あ。一分上のようこ
さうあた当色だん。

ふ熟せだ。もみつる貧く作ふうのふあら
ず。ふ熟せだ。おくて。もみ。
だ。おるたけだんぜ。
あるものいお麦稗未納
ものの。ためふ作り実ぞ
江作ふがいあり。そこ土
思ふそんな百ふふうの
ものたねこおるあり元来
より。あ。一分上のようこ
さうあた当色だん。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

いもづる
一稗四粒を六年。おうば。粟こびる
ほうこと三年。いも
一大小豆大麦と同蒔。そうち
一荒田地四年。おうば。あたゝかに
年いも
一胡麻。四粒七八年。おかば。荏あと
ゝ年いも。まゝ胡麻を
も。実のこぼ

一木綿四粒。さのこまりあるら。こゝ多
る草大根のあいも
一蕎麦四粒。さらに実のこぼ。七八年以
上も
一蜜蜂ぶんぶんの。毎
一茸四粒あこ年いも。おかば。そびまるら。
あゝ。七八年いも。稗。そ
一さるまいも。四粒。さらに
一年もいも

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

一大根四把。さのきらいむ。まかいかねあをいむ。あとをいむ
一夕うは。四把七八年いむ。その不かねあをいむ
一菊子四把。七八年いむ。大角豆ひねあをいむ
ものあといむ
此外野菜のるゐ。行てもとめ。又ハ作りて。
ふるまふ。こと是ハ勿論のあとハさのごとし。
誠ニ

好地

一大麦沃あかひへ胡麻よし
一大麦小麦の瞎入大小ともよし
一胡麻あく小麦ぶどくよし
一菜豆あくあかひへよし
一芋あと室地おうぼ稗多くあいよし
一蕎麦あくあいよし
一開發地芋よくたねふあくあいよし
一粟ひへこ年のあと大小豆よし

一苑木綿あり。
一大豆あり。
一木綿あり。
右通り四地乃地なり。
一用ゆ。多く用いなり。
あそを多く。用ひても。実のる。
実のる。里こまのように。
又もり俗あり。これも四地乃地をもまく試こ
俗で。旦年の年後まきこふ熟

もの俗あり。先木綿ごもまち栗あり。
ふ不熟つを。ふ不年ハ多く俗ふ不
年ハ。ふ荷ふ者年。俗ふ荷極の名をさざむ
者の事作。まさごうて荷
べ〳〵。そも豊熟ふる頼ひ
ふ熟つを。ふひて。書く熟る者あり。
都るよく〳〵。こころざべ撰
俗熟をく。実ためて
投を。ま荷ふかり
花一ツニツ咲ハ又

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271

ガラス使用

うそうを入れ。粉をのれ共。流霊をくわへ。
○かけよく粉をまぜこぜをすまざるあひだ。
くるみそうを方よりかきあけぬるとき。
よりあつくなりかくのごとく三四度くりかへし。
ぬるとき。れバおのづからわかるを掬ひおとすべし。
湯加減をよくこゝろえてたねをこゝろ。
とよくこねまぜ合をたるを竹のうらのひやしてふる
ひて蒔べし。○粟稗抔麻在をも仕立てもよし。
湯かゝるたねをいれ蒔べし。

おほくふるときは。きりあつくなりてもるゝ。
所へ粉をいれ敷をくべし。
まそふるひ蒔べし。○粟稗の類ことなを。
小半升の割合を。きりあつく。並開ゆる。
粉ぐるも。多くまきたねおくれるあり。
切り通しを開てふるべし。
○左二毛ことなし開てふり。
一様に仕立て数を改めて。屋の谷を
方ねんごろにて。海桶の中へめか

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

ごをいれて俵に俵よりくゝりだし。俵を合せべ
し。さもなくてはかをりてまゐりてもちのめかごそ
ゝとしてもちのめかごそゝとしてもちのめかごそ
ゝぐ事。

籾收納方

○籾を極熟するを時を外りて納めべし。いま
だ極熟せざる時收納をすれば。一割餘の損
あり。又その性をよくさとりて納べし。一割餘の損
なり。又ふるくなりたる籾もまた種なし。

○日を更さゝる前穀まだ〳〵水をれい米
悪〳〵俵てをよふ。十日余も日
を更れば実るなり。もし雨雪障りても。根
絶外もるもの。

○栗おそれ極熟をうり納べし

○大麦おそく水ぎわありて納べし

○稗のあるを外りてとりていまだ
籾をよくもみたるよりよくさりを收納をべし。外

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

○小麦そださゝ。蒔たまゝ收納をゞ
○苧のまゝ。熟〳〵。熟〳〵時よく。古井〳〵実のる新〳〵熟たねよし。地ふるのるまのゝ
○まきりは稙よ。ちふ稙
○稲もみ熟〳〵方ふ稙あり。三種を考〳〵。
又風雨水難おの〳〵もらいふまりてとり
おさむべし〳〵

諸木植方

○松稙をかもゝ秋実おをとり。日向ふ苗代を

植〳〵のこぎりくゞをゝ。木の実ふせて。表の
彼岸ふ。まきき翌年〳〵。又二年目ふ別へ
おゝ〳〵。什をこら〳〵。一尺壱尺一本の割合ふ
て。立根をきりて。植替ゞ〳〵。植
木の葉ふ。又を庭のゝ。
いねく。栗ふふして。
出て。根ふより。秋を
二三年目ふ二月中ふ。雨
ありてほゝ。植をゞる
ゝ。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

なり。依而彼岸限りよく熟ごく。
又大寒ニ一年おまぐ一方の枝をきりこ
中をすかして。空方ニ年おきり枝をきり
伐りて。植れバ枝ニ成ル。諸木ハ八十八
夜ニ葉ニ成ル。此ニ人ニ寿ヲ全ふ。耕作法ハそ
ニ葉ニ成ル。天地の生ヲ助ル。

てまきおくべし。大陰ふくて陽気引也
土中湿ちり。人ニ気ニ包こ而湿おそて陰
今りて陰ニ気外ニ発ニ実健ちり。故ニ無ニ
ちを。保つことニ気ちり。大ふ長く。此ニ
てまき時ニ葉おおふ。時ニ葉ニ成ル。
だ。陰陽和合の気ニ而ニ月二月ニ生ニ
汚ニ成ル。

き本のまゝ十日も植てよきものぞ。實
ばかりをえらみいるゝもよし。其年
植ずして又八十八歳より。ふかく能
きるものぞ。根ざしようきやうに
陽気つゞかず。秋気。萌
おこるをもつて。ふかく植るもよし。
八重ざくらなどを。ひくく
植ずんば

　竹の植方

○かき竹を。植るにはまづ
竹の

をおかぶかり。雑木を伐たふし。二月半より
三月中ばまで植てよし。たゞ二枝もおし。
まんをきりて。植るものぞ。あるひは
まだらのまゝおくもある。竹をかりて植ふ。まこと
きらずぶ植れば。茂りよく。ふかくこえを用
ゐれば。茂るもの。且細工ある竹なり。
てばなしかり竹をきらふ。若竹
古地のよりのをきらふ。若竹をいぐさを植の
さかふ。松の年ごろ竹の

まみの米。まぶもうハ松のおのある葉も
毎年一。又数十年をぎて。竹生ハ
ぬる芝ハ。ゆらぐ伐まで。か
ならず生ず。又死絶ゆる事なくて。竹のまぶ実
なりて。枯ることあり。を附ざる実ハ
なる。熟稔をへ。年をへて能
生ずる。旦を春ふ伐よ。その古ハ九十月之。
あと年の春る。たゞ新きり附ざる。
又二百まで不。新竹を除して。伐ず又

雲の生ずる所ハ。夜の去ること
あるまで。又年の植方。伐方もおかず
竹ふのうるの形。この竹ハ
此二ハ。民家要用のもの。大略を記す。
外竹も此同ぢ。
ハ多く仕立べし

○農業全書ハ。一人耕して。指人の扶持
になる書ハ。尊ぶの竹ハ。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

お膳の飯の如く、よく煮熟して得て、前より死せる人の一人の耕作をもたすけ、就業家の業をも妨げざれば、無駄飯を喰ふ事にはあらず。

石高。穀麦二十二石。一割増し二十二石。二斗増して。二石と合せて。十八石二斗と。見十人の扶持あり。已が一代三年年。耕せざるより損のみ。十二石の差引。

夫婦。自給の代の。差引五石余。

お膳の飯の如く、よく煮熟して得て、前より死せる人の一人の耕作をもたすけ、就業家の業をも妨げざれば、無駄飯を喰ふ事にはあらず。

石高。穀麦二十二石。一割増し二十二石。二斗増して。二石と合せて。十八石二斗と。見十人の扶持あり。已が一代三年年。耕せざるより損のみ。十二石の差引。

夫婦。自給の代の。差引五石余。

お膳の飯の如く、よく煮熟して得て、前より死せる人の一人の耕作をもたすけ、就業家の業をも妨げざれば、無駄飯を喰ふ事にはあらず。

石高。穀麦二十二石。一割増し二十二石。二斗増して。二石と合せて。十八石二斗と。見十人の扶持あり。已が一代三年年。耕せざるより損のみ。十二石の差引。

夫婦。自給の代の。差引五石余。

お膳の飯の如く、よく煮熟して得て、前より死せる人の一人の耕作をもたすけ、就業家の業をも妨げざれば、無駄飯を喰ふ事にはあらず。

石高。穀麦二十二石。一割増し二十二石。二斗増して。二石と合せて。十八石二斗と。見十人の扶持あり。已が一代三年年。耕せざるより損のみ。十二石の差引。

夫婦。自給の代の。差引五石余。

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

特1
271

農業自得巻下

嘉永五年壬子新刻

大坂

心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　博勞町　河内屋茂兵衛
同　筋本町角　河内屋藤兵衛

江戸

日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　小林新兵衛
本石町十軒店　岡田屋嘉七
大傳馬町二丁目　英大助
横山町三丁目　丁子屋平兵衛
淺草茅町二丁目　和泉屋金右衛門
筋違御門外旅籠町一丁目　須原屋伊八
紙屋徳八

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『農業自得 2巻』 請求記号 特1-271

ガラス使用